

アイヌ語のアスペクト的表現「kor an」「wa an」をめぐる問題について

吉川 佳見

0. はじめに

本稿は、日本語の「ている」に相当する形式と考えられているアイヌ語のアスペクト的表現「kor an」「wa an」について、先行研究で指摘されてきた問題を踏まえつつ考察したものである。

アスペクトとは、ある事態を述べる際に、その内的な時間展開をどう捉えるかに関わる文法カテゴリーである。これに対してテンスは事態が時間軸のどこに位置づけられるか、つまり外的な時間に関わる。日本語では、テンスでいえば過去形（タ形）か非過去形（ル形）かという対立、アスペクトで言えば完成相（スル・シタ）か継続相（シテイル・シテイタ）かという対立がある。テンスとアスペクトは互いに関係しあって事態を表現する。

しかし、アイヌ語はテンス対立のない言語である。外的な時間は副詞や文脈によって表され、動詞そのものの形を見ただけではそれがいつの出来事なのか、判別できない。例えば、動詞 ek は「来る」とも訳されるし「来た」とも訳される。

numan ek. 「昨日（彼／彼女が）来た。」（作例）

昨日 来る

nisatta ek. 「明日（彼／彼女は）来る。」（作例）

明日 来る

そして、アスペクト形式も必ず必要というわけではない。場合によっては、動詞そのものの形で継続的な意味を表すこともある。今回取り上げる「kor an」「wa an」も継続を表す形式とされながらも、その実態が全て明らかになっているわけではない。本稿は、既に指摘されてきた問題点を部分的に再検討したにすぎないが、用法の整理にむけての一端となればと考えている。分析に使用したデータは沙流方言のものであるが、一部千歳方言も含む。また、参照した文献にはその他の方言のものも含まれているが、例文として掲載はしていない。

1. 「kor an」「wa an」の用法に関するこれまでの記述

「kor an」「wa an」の用法については、主に中川(1981)、佐藤(2006,2008)、によってまとまった記述がなされている。また、田村(1972)などにおいても接続助詞の説明に関連して例が挙げられている。

●kor an

・変化を表す動詞と共起し、その変化の結果の状態に至るまでの過程を表す。

(1) mokor kor an. 「眠りつつある」
眠る て いる

(田村 1972 : 153)

・変化に関与しない単なる動作を表す動詞と共起し、動作の継続を表す。

(2) apkas kor an. 「歩いている」
歩く て いる

(作例)

・「kor an」の an の人称は、kor an の付く動詞の人称と一致する場合もあれば、しない場合もある。

(3) ku=ipe kor k=an. 「私は食事している」
1SG.S=食事する て 1SG.S=いる

(作例)

(4) mak ne siri an sekor ku=yaynu kor oka=an a p
どう COP EVある と 1SG.S=思う て いる.PL=4.S PERF NOM
「どうしたのだろうとわたしは思って (わたしたちは) いたが」

(田村 1972 : 150)

・習慣的動作を表すことがある。

(5) nen ne yakka sapaha kunnere kor oka.
誰 COP ても 頭 黒く染める て いる.PL
「だれでも頭を黒くそめている」

(田村 1988 : 55)

●wa an

・変化を表す動詞と共起し、主体・客体の位置変化、状態変化を表す。

自動詞に付いた場合

：主体の位置変化または状態変化を表す。

(6) nen ka soy ta ek wa an. 「誰か外に来ている」【主体の位置変化】
誰 か 外 に 来る て いる

(7) mokor wa an. 「眠っている」【主体の状態変化】
眠る て いる

(中川 1981 : 132)

他動詞に付いた場合

: ①主体の状態変化を表す場合と、②客体の状態・位置の変化を表す場合がある。この違いは、*wa an* の *an* のとる人称に反映される。

(8)①*sake ku=hok wa k=an na en=kosinewe yan.*
酒 1SG.A=買う て 1SG.S=いる から 1SG.O=遊びにくる ~てください

(9)②*tonoto ku=hok wa an na en=kosinewe.*
酒 1SG.A=買う て (3.S=)ある から 1SG.O=遊びにくる

(中川 1981 : 133)

・変化に関与しない単なる動作を表す動詞とは共起しない。

(10)**apkas wa an* 「*歩いている」
歩く ている

(「歩くんではなくて、立っているみたいだ」という話者の見解)

(中川 1981 : 136)

おおよそ、沙流方言でも千歳方言でもこのように説明されている一方で、様々な問題点・疑問点も指摘されてきている。断片的ではあるが、次章以降で現時点での見解を示していきたい。

2. 本稿の視点

2.1 変化の観点からの仕分け

アイヌ語では、日本語の形容詞に相当するようなものも「動詞」のカテゴリーに含まれる。また、日本語（標準語）ではテイル形をとることがないような動詞でも、アイヌ語では状況が異なる。

アイヌ語の動詞には「普通には持続的な意味の様相を表す」ものとそうではないものがあり、単独で述語に用いられた場合、前者は「～している」と現在形に訳され、後者は「～した」と過去形に訳される（知里 1973[1942] : 498-499, 504、中川 1981 : 131）⁵。前者には存在動詞や形容詞的な動詞⁶も含まれる。つまり、単独で状態性をもつものと、もたないものとに分けられる。これまでの「*kor an*」「*wa an*」の用法についての研究は主に後者＝単独で状態性をもたない動詞との関係を中心にしたものであり、状態性をもつ動詞との関係についてはあまり触れられてこなかった。しかし、状態を表しうるかどうかとい

⁵無テンスの言語では、「不完結相のアスペクトと現在の時間とのあいだに、完結相のアスペクトと過去の時間とのあいだに密接な近縁関係がみられる（コムリー1988 : 132）」。

⁶アイヌ語では「形容詞」というカテゴリーは立てておらず、動詞に含まれる。

う基準ではなく、変化を表しうるかどうかという基準を本稿では主に考える。それに際し、以下の知里(1973[1942])を参照されたい。(一部、現代仮名遣いに改めた部分や、アイヌ語ローマ字表記を改めた部分があるが、語彙・文章の内容に影響はない。)

態⁷は語彙的にも個々の用詞の意味の上に表現されている。例えば、(イ) an「ある」とか kor「もっている」という用詞は普通には持続的な意味の様相を表す。また、(ロ) osma「はまる」とか numa「起つ」という用詞は常に瞬間的な刹那的な意味の様相を表わす。用詞によっては、(イ) (ロ) いずれをも表わし得る。例えば、ne (イ)「である」(ロ)「になる」。eraman (イ)「知っている」(ロ)「判る」。所謂「形容詞」はすべてこの両方の意味をもっている。尚上に(イ)の例として挙げた an や kor も (ロ)の意味に用いられることがある。

paykar an「春になった。」 mici an=kor「孫を我・持った。」

以上(イ)(ロ)においては、過程が時間的に表現されている。然るに用詞によっては、何ら時間的な観念を含まず、所謂アオリスト的に過程のみを表現するものがある。例えば(ハ) apkas「歩く」や kar「造る」は単に「歩く」「造る」という事実のみを表わし、継続とか完了とかの観念は含んでいない。これに助詞がついて始めて継続とか完了とかの意味が現れるのである。

apkas kor an「歩きつつある。」⁸ kar hemaka「造り終えた。」

(知里 1973[1942]: 498-499 を参照、一部表記改変、文中の注釈は筆者による)

(イ)は通常存在や状態を表す動詞であるが、(ロ)のような意味、つまり「瞬間的な刹那的な意味の様相」も表しうる動詞である。ここで「瞬間的な刹那的な意味」としているのは、「変化」のことだと考えられる。形容詞的な動詞も(イ)に含まれ、すべて状態も変化も表す。(ロ)は既に述べたように、(瞬間動詞=)変化動詞のことである。一方、(ハ)は変化をあらわしえない動作動詞である。このことから、アイヌ語の動詞をアスペクトという観点で見た場合、「変化を表しうるかどうか」というひとつの基準をたてることができる。以下表1の太枠内が、本稿での視点を表したものである。

変化を表しうる動詞	(イ) 形容詞的な動詞や、an「ある」、ne「である」kor「もっている」などの動詞	状態性あり
	(ロ) 変化動詞	状態性なし
変化を表さない動詞	(ハ) 単純な動作動詞	

表 1

⁷ 現在、「アスペクト」を指すものとしては「相」が一般的であるが、ここでは「態」が「アスペクト」を指すものとして用いられている。

⁸ ここでの「つつある」は現代日本語の動作継続「ている」の意味で用いられている。

知里(1973[1942])では、(イ) (ロ) は「過程が時間的に表現されている」もので、(ハ) は「何ら時間的な観念を含まず、所謂アオリスト⁹的に過程のみを表現する」ものであると説明されている。おそらく「時間的」というのはテンスではなくアスペクト的な時間のことであり、時間的な観念の有無は、変化の有無とつながっている。変化を表す動詞はその運動¹⁰の終了とともに変化の意味が成立するのであり、変化が生じるには時間の推移が必要になるからである。(動作のみを表す動詞は、動作のどの段階を切り取っても同じであり、時間の推移を必要としない。) このように、それのみで状態性を表す動詞であっても、変化の意味を持ちうるという点から動詞を二分することができる。

2.2 運動の時間的な構造

2.1 に関連して、アイヌ語のアスペクト表現を考える上では、完成相と継続相との対立の問題がある。工藤(1995)によれば、日本語において、「スル (シタ)」が表すアスペクト的な意味は次のようなバリエーションがあるという。これらは、「すべて、継続性を無視して、そこで運動過程が成立する開始の時間的限界や、そこで運動過程が消滅する終了の時間的限界を必ずとらえている点で、共通している。(工藤 1995 : 80)」

(1)<ひとまとまり性> 運動(動作、変化)の成立=開始限界から終了限界までを全一的にとらえる

(2)<限界達成性> 開始の時間的限界か終了の時間的限界のどちらかのみをとらえる

(2・1)<終了限界達成性> 変化の終了(結果の成立)限界をとらえる

(2・2)<開始限界達成性> 動作の成立=開始限界をとらえる

(工藤 1995 : 80)

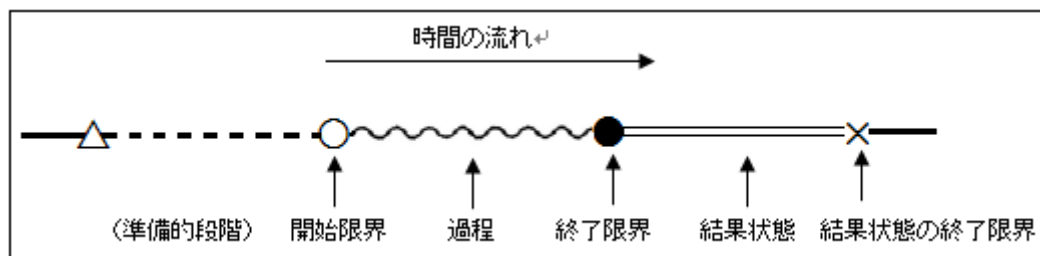
また、運動動詞を「主体動作・客体変化動詞」「主体変化動詞」「主体動作動詞」に分け、それらが表しうる範囲を以下表2のように示している。

	スル	シテイル
主体動作・客体変化動詞	ひとまとまり性 = 終了限界達成性	動作継続性 (変化結果継続性)
主体変化動詞	終了限界達成性	変化結果継続性
主体動作動詞	開始限界達成性	動作継続性

表 2

⁹ 完結相過去。しかし、この「アオリスト的」という表現は一考を要する。

以下の図は、金水(2000)による「運動動詞が表す出来事の時間的な構造」であるが、工藤(1995)の引用とともに参照されたい。すべての動詞がこの図に示された過程をカバーしているということではなく、この構造のどの部分を持っているかによって動詞の意味的特徴が分かれる。(金水 2000 : 17)



図

表 2 によれば、日本語の変化動詞（ここでは「主体動作・客体変化動詞」「主体変化動詞」をまとめて称する）の完成相はいずれも終了限界達成性を含むが、アイヌ語の動詞においては状況が異なる。

(11) “mak e=iki sir an? hnta e=kar? hnta e=kar?”

どう 2SG.S=する EV ある 何 2SG.S=作る 何 2SG.S=作る

「お前は何をやっているんだ。何を作っている？何を作っている？」(平 01 : 38)

これは、主人公が自分の家にいったところ、妻¹¹が何かを鍋で炒っている様子を見て発した言葉である。kar は「kar wa an」という形が認められる動詞¹²なので変化を表す動詞だが、この時点では動作の最中であり、変化は生じていない。例(11)のように、アイヌ語では動詞そのままの形でスルもシタも表されるが、テイルとしか訳せないような継続的な意味にもなりうる。上記の様な例では、形としては完成相だが、運動の開始限界から終了限界までをひとまとまりに捉えているとはいいがたく、運動の開始限界達成のみを捉えていると考えられる。これは、日本語の「主体動作・客体変化動詞」の完成相が<ひとまとまり性=終了限界達成性>を表す¹³のとは異なっている。変化を表す動詞であっても、動詞によっては、変化の達成=終了限界には言及せず、動作が成立=開始限界が達成されてさえいれば、動詞の意味は表されるということになる。尚、「スルにおいては、<動作の開始限界の達成性>のみを表して、動作の終了限界=変化の達成までとらえていない場合も起こる(工藤 1995 : 83)」が、その例(以下参照)は、例(11)の下線部とは視点の異なるものである。

¹¹ 正式には本妻以外の妻。

¹² 中川(1981)

¹³ 工藤(1995 : 81)

レイコさんが僕のベッドを片付けているあいだ、直子が台所に立って朝食を作った。直子は僕に向ってにっこりと笑って「おはよう」とった。おはよう、と僕も言った。(後略)

(ノルウェイの森) (工藤 1995 : 83)

3. 本論

3.1 「変化動詞+kor an」の示すもの

「kor an」は変化を表す動詞に付いた場合は変化に至る過程を表すが、どの変化動詞であってもそれが常に表されるというわけではない。中川(1981)によると、「mokor kor an. 「眠りつつある」(田村 1972)」に対しては、インフォーマントの2名いずれも「そのようなおかしい言い方はしない」と述べたという。「その動作・変化が、人により場合により、どの程度持続するものとしてとらえられるかにかかっており、絶対的な線が引けるものではない(中川 1981 : 135)」のである。これに関して、動作の開始限界、あるいは開始限界達成後の状態が意識されやすいかされにくいかという点が、まずは関係しているのではないかと考える。

(12) cikap hopuni wa arpa kor an.

鳥 飛ぶ て 行く つつ ある

「鳥が飛んで行きつつある」

(中川 1981 : 137)

(13) poro kunne seta ek kor an.

大きい 黒い 犬 来る つつ ある

「大きな黒い犬が来つつある」

(佐藤 2013 : 139)

例(12)の arpa 「行く」は、どこかへ到着するという変化的な意味は生じていないため変化としては終了限界には達していないが、動作事態は開始限界を超えていて既に成立している段階にある。つまり、「arpa kor an」は変化的な側面から見れば「目的地への到達という変化が起こるまでの過程」だが、動作的な側面から見れば「行くという動作の最中」である。例(13)も同様である。こうした arpa 「行く」や ek 「来る」などの移動に関する動詞のほか、nu 「聞く」や nukar 「見る」などの知覚に関する動詞、yaynu 「思う」などの思考に関する動詞は、「wa an」をとる変化動詞でかつ「kor an」とも共起することが既に述べられている。しかしその場合、いずれも変化に至るまでの過程のみが焦点化され、動作との関わり合いはあまり触れられてこなかった。運動の開始限界＝動作の成立をこえる

ものであれば、終了限界＝変化の成立に達していなくても、出来事としては成立している
のである。

変化動詞が「kor an」をとるかとらないかに差が出るのは、この動作の成立＝開始限界
が認識されやすいかどうかによると思われる。先ほど「mokor kor an. 「眠りつつある」
(田村 1972)」という表現が可能であるかどうかには揺れがあることについて触れたが、
おそらく、mokor 「眠る」の動作的側面をその話者が認識しやすいかどうかという点で差
が生じるのだろう。眠るという運動は、眠りに入るという変化が生じたときに運動が成立
し、それは同時に、実際に眠っている動作がみられるということでもある。このように、
終了限界（変化の成立）と開始限界（動作の成立）が重なり合っていた場合は、変化動詞
としての本質的な部分である終了限界達成性が優位となり、動作としての「眠る」が表面
化しにくいのだと思われる。まだ眠ってはいないがうとうとしている、というような状況
を mokor の語彙的な意味として認めるか、つまり動作的側面として捉えるかどうかという
差がある。

これに対して、移動・知覚・思考に関する動詞は、全てとは言えないが、開始限界と終
了限界とを分けて認識しやすいのだと考えられる。目的地に着くまでの過程・何かを認識
するまでの過程・何かを思いつくまでの過程も動作として認識されるのである。

3.2 運動の質的な差

知覚を表すものの中でも nukar 「見る」という動詞は、他と様子が異なる。中川(1981)
によれば、通常、「wa an」をとる動詞（変化動詞）は「kor an」をとった際に「変化の過
程」を示すが、nukar の場合は例(14)(15)のように「nukar kor an」でも「nukar wa
an」でも同じ状況で使用できるのである。この二例は、別の話者がそれぞれ「何見てる
の？」という文を表したものである。

(14) hinta e=nukar kor e=an?
何 2SG.A=見る て 2SG.S=いる

(15) hemanta e=nukar wa e=an?
何 2SG.A=見る て 2SG.S=いる

(中川 1981 : 138-139)

氏は、この他の用例も踏まえ、「nukar kor an」と「nukar wa an」は同一の状況に対する
見方の差によるものであると述べている。「<注視する>という能動的な「見る」行為そ
のものを nukar が表す時、kor an をとり、<視線をそちらに向ける>といった変化を

nukar が表して、その後の「見ている」状態が、＜目を向ける＞という行為の結果の状態と見なされる時、wa an をとる（中川 1981 : 140）」と説明している。前者は動的、後者は静的な運動である。このような質的な差が「kor an」「wa an」の選択に影響するのは nukar だけではない。佐藤(2006)では、epunkine「守る」は「wa an」をとる例しか見いだされていないと書かれているが、後に佐藤氏がまとめた資料を参照すると、epunkine に「kor an」が付いた例が掲載されている。

(16) ku=kor son k=epunkine kor k=an.

1SG.A=持つ 息子 1SG.A=守る て 1SG.S=いる

「息子を（私は）お守りしている」

(佐藤 2014 : 25)

epunkine は「守る、見守る、国を治める、看護する」という意味をもつ動詞であるが、例(16)のように「おもりをする」という意味にもなるようである。「epunkine kor an」は「おもりをするという変化に至るまでの過程」ではなく、「おもりをする」という動作を動的に捉えているといえる。おそらく、epunkine が静的に守護するような、国を治めるような場合は wa an をとり、子どものおもりをするような動的な場合は kor an をとりやすいのではないかと考えられる。「看護をする」という意味では、「yaynuwen wa epunkine wa an 具合が悪いので看護している（田村 1996 : 112）」という用例が辞書にあるが、これは動的・静的という差が、単にその運動を捉える感覚的なものだけではなく、人称とも関わりあっていることと結びついているのだろう。nukar の問題に関して、中川(1981 : 140)は動作主が一人称の場合は「kor an」、二人称の場合は「wa an」が多用されていると述べている。ここから、たとえ、epunkine のような動詞であっても、それが自分の動作であれば「kor an」が選択され、他者の行為であれば「wa an」が選択されるのではないかと推測される。別の側面からいえば、自分の動作であれば運動の開始限界をとらえやすく、他者の行為であれば運動の終了限界に焦点が重なりやすいのではないともいえる。例(16)も動作主は三人称である。

ここまでを本稿の見解と併せて考えてみると、次のようにまとめられる。

- ・動作のみを表し変化に関与しない動作動詞は、必然的に「kor an」をとり、また、必然的に動的な性質をもつ。（もちろん、終了限界をもたないので「wa an」は付かない）
- ・変化を表しうる動詞が「kor an」をとるかどうかには揺れがあるが、それは①限界達成性と②運動の質的な問題という点から説明される。

①運動の開始限界と終了限界が区別しやすいような、ある一定の過程をもった変化動詞の場合、語彙的意味の成立は必ずしも変化＝終了限界にあるというわけではなく、動作＝

開始限界にもある。この開始限界が認識されやすいものであれば、「kor an」をとり、動作の最中であることを表すことができる。

②運動の質的対立は「kor an」「wa an」の選択に関係する。動作のみを表す動的運動は必然的に「kor an」である。変化を表わし得る動詞であっても、動作性をもつ語彙の意味が表面に出た場合は、「kor an」が選ばれる。あるいは、動作主が誰であるかによって、つまり、話者と運動との距離の緊密さによることもある。

①の限界達成性に関しては、「③意図的に開始限界に言及している場合は「kor an」、終了限界に言及している場合は「wa an」をとる」という別の側面も考えられる、

(17) ku=kar kor k=an pe pirkano nukar wa an.
1SG.A=作る て 1SG.S=いる もの よく 見る て いる
「私がやることをちゃんと見てなさい」

(中川 1981 : 139)

例文(17)は、「見ている」と言う命令文であるが文意からすると、「よく見ている」という意味で「kor an」が選択されてもよいはずであるが、そうはならない。これを、「視線をむけている」という意味で捉えることもできるかもしれないが、むしろ、ここでは運動の終了限界に焦点が当てられているのだと考える。つまり、nukar「見る」という運動の過程を終えることに言及しているのである。また、以下のような例(18)(19)では、限界点そのまま動詞の語彙的な意味とつながっている。

(18) k=arpa akusu tane okere wa an.
1SG.S=行く すると もう 終わる て いる
「行ったらもう終わっていた」

(19) tane k=oasi kor k=an wa.
もう 1SG.A=始める て 1SG.S=いる よ
「もう始めているよ (既に始まっている)」

(いずれも中川 1981 : 138)

okere「終える」は「wa an」をとる変化動詞、oasi「始める」は「kor an」しかとらない動作動詞と考えられている。これらには「okere と oasi という行為を行った後の状況の、性格の違いに由来する (同頁)」質的な問題の作用もあるが、そもそも運動の限界点がどこにあるかという差が「kor an」「wa an」の差につながっているのだと思われる。

また、上の例(18)(19)は、単に「kor an」が動作継続で「wa an」が結果継続であると仕分けきれないことも示唆している。「kor an」が全て動作継続を表すならば、oasi「～を始める」は「oasi kor an」で「始め続けている」「始めながらいる」という意味になってしまうからである。日本語に訳された場合、「始めている」となるが、この日本語の「始めている」の場合は動作継続ではない。これは、「kor an」がパーフェクト性を示すということではなく、動作の開始限界に達し、その後の過程に話者の視点があれば、「kor an」を用いることができるということである。変化を表し得ない動作動詞は kor an をとるが、「動作動詞」とは言えないようなものであっても、こうした開始限界しかもたないような動詞であれば必然的に kor an をとると考えられる。

接続助詞 wa「～て」は主に前後の継起関係や因果関係などを表すものであり、おおよそ前の出来事が完了してから後の出来事が生じることを表わすときに用いられる。wa 自体が運動の終了限界と結びつき、「wa an」で終了限界達成後（＝変化の結果状態）が示されるのは自然なことであると言える。一方、接続助詞 kor「～ながら、つつ」は、基本的には二つの事象の同時進行を表すものであるから、過程が認識されやすい動作そのものと結びつくことになる。

尚、以上で述べた①②③は、動詞の本質的な意味や話者の運動の捉え方、その場の状況などによってどれが優勢になるかは異なってくるものと思われる。

3.3 状態性動詞と「kor an」「wa an」

アイヌ語では、存在動詞や形容詞的な意味を表す動詞にもアスペクト表現の「kor an」「wa an」が付くという特徴があるが、そのような動詞（以下、状態性動詞と呼ぶ）との関係性については、これまであまり触れられてこなかった。

(20) pet poro kor an.

川 大きくなる て いる

「川が増水している」

(佐藤 2007 : 44)

例(20)は同頁で「動作継続」と説明されている。poro は単に「大きい」という形容詞的な意味だけでなく「大きくなる」という意味も持っているので、ここでは動作として「大きくなる」ことの継続性が見てとれる。しかし、それだけでなく、変化の過程が認識しやすいと言う点も「kor an」をとる理由になるだろう。この点で、状態性動詞を一種の変化動詞とみることはできる。そして、終了限界に達したとき、「大きくなった」という変化が生じるが、

変化の結果状態(=ここでは恒常的状态性)は「poro wa an」で表されるとは限らない。変化の結果状態にあたる部分は poro「大きい」という恒常的性質であり、動詞単独で意味が実現されるからである。状態性動詞がいわゆる変化動詞と異なる点は、語彙の本質的な意味が通常どこにあるかという点である。変化動詞の場合、主幹となる意味は終了限界点にあるが、状態性動詞の場合は終了限界を含む終了限界達成後の段階まで幅をもって存在している。終了限界達成後の段階は、変化の結果状態の段階に相当するため、意味の重複から、アスペクト的な用途での「wa an」は排除されやすいのだと考えられる。

実際に「状態性動詞+wa an」という形式はいくつも例が挙げられてきているのだが、変化の結果状態という意味が明確に表されていないため、「wa an」によって何が意味されているのかという点が指摘されてきた。そのような例には、iwanke「元気である」、totek「無事である」、tumasnu「健康である」、siknu「生きている」といった動詞があるのだが、必ずしもアスペクト的な用途での「wa an」を考慮する必要はないと考えられる。

(21) e=iwanke wa e=an ya ? 「あなたは元気／達者でいますか。」
 2SG.S=元気である て 2SG.S=いる か

(22) ku=iwanke wa k=an. 「私は元気／達者でいます。」
 1SG.S=元気である て 1SG.S=いる

(いずれも田村 1996 : 255)

例(21)(22)は「元気でいたか?」や「元気でいるよ」という意味であり、「元気がなった(なっている)か?」「元気がなった(なっている)よ」という意味ではないのであって、「(元気でない状態から)元気になる」という変化の結果状態とは捉えられない。そのため、「ている」というアスペクト的な連語形式というよりは、iwanke「元気である」、付帯状況を表す wa, an「暮らす」という要素から成っているとみえる。接続助詞 wa の意味には継起関係や因果関係の表示もあるが、付帯状況¹⁴を表すこともある。また、an は単なる存在だけでなく「暮らす」という意味もある。結局のところ「元気で暮らしている(か)」=「元気でいる(か)」と訳せるので差はないようにみえるが、この「~でいる」は変化の結果状態を示すものではない。

ただ、siknu「生きる」については「生きて暮らしている」というとおかしな意味になってしまうので、単純に「生きている状態にいる」ということになる。また、siknu は「生き

¹⁴ 付帯状況、動作の行われ方を表す。ku=pon hi wano aynu itak patek ku=nu wa ku=poro p ne. 「小さい(ku=pon)頃(hi)から(wano)アイヌ語(aynu itak)ばかり(patek)聞い(ku=nu)て(wa)私は大きくなったもんだ(ku=poro p ne)。」(佐藤 2008 : 45-46)

返る、命をとりとめる」という意味もあるので、そのような意味で使われた場合は変化の結果状態を表す「wa an」なのである。(例 23)

(23) menoko patek sinen ne siknu wa an

女 だけ 一人 で 生きる て いる

「女一人だけが生き残った」

(千葉大学 2015 : 1912)

実際に、siknu は状態性動詞ではなくいわゆる変化動詞のほうに振り分けて考えられる場合があるので、単に動詞単独で恒常的な性質を示すというだけでは状態性動詞かどうかは判断できないのかもしれない。

4. まとめと今後の課題

以上、部分的ではあるが、「kor an」「wa an」をめぐる諸問題に触れ、見解を述べてきた。

動作のみを表す動詞の場合、必然的に kor an が選ばれる。変化を表す動詞の場合、wa an で変化の結果状態を表すが、kor an をとるかどうかは、①運動の開始限界が区別されやすいか、②運動が「動的」であるか（語彙的な意味と動作主が関係する）、③意図的に開始限界に言及しているか、という点が相互複合的に絡み合って判定される。また、変化を表すという点で見れば、状態性動詞にも変化動詞的な側面があり、動詞によっては恒常的な性質を表しているとみられるものでも、変化性ほうが強く出る場合もある。現時点では混沌としているので、今後より細かな分類が必要である。

「kor an」「wa an」は日本語の「ている」に相当するとされやすい形式だが、単に「ている」との対照からだけでは捉えきれない問題をはらんでいる。アスペクト表現として考えられている連語形式の kor や wa の役割は、文をつなぐことではなく、前後の動詞（句）と an を結びつけることであるのだが、もともとの接続助詞としての意味はやはり影響している。また、an が人称をとるという点も考慮にいれなくてはならない。それぞれの構成要素の独立性が意味にどこまで影響しうるか、そして、何がアスペクト表現なのかという問題はさらに検討する必要がある。

この他、他の接続助詞との関連性や、「wa an」以外の「動詞（句）₁+wa+動詞₂」で構成される連語形式のアスペクト表現の分析、日本語の方言「シトル」「シヨル」などとの対照も課題である。

参考文献

- 金水敏(2000)「時の表現」『日本語文法2 時・否定と取り立て』岩波書店 p.3-90
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- コムリー,バーナード(1988)『アスペクト』山田小枝訳 むぎ書房 [Comrie,B. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press.]
- 佐藤知己(2006)「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12 pp.43-67 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- (2007)「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」『日本語学』26(3) pp.44-52 明治書院『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13 pp.1-14 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- (2008)『アイヌ語文法の基礎』大学書林
- (2013,2014)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』23 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター
- 田村すず子(1972)「アイヌ語沙流方言における『…して』の表現」國學院雑誌 73 卷 11 号 pp.146-163
- (1988)「アイヌ語」亀井他 編『言語学大辞典 第1巻』pp.6-94 三省堂
- (1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
- 千葉大学(2015)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次 (北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書』3
- 知里真志保(1973[1942])「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』第3巻 pp.455-586 平凡社
- 中川裕(1981)「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習'81』pp.131-141 東京大学文学部言語学研究室

(よしかわ よしみ・千葉大学大学院人文社会科学研究所)